

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Maradjiri, the Star Ceremony in Djinang : A Record of Making Ethnological Films on Contemporary Arnhem Land Aborigines

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松山, 利夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004327

アーネムランド・アボリジニ，ジナン族の星まつり

—国立民族学博物館海外映像音響資料収集の記録—

松 山 利 夫*

Maradjiri, the Star Ceremony in Djinang: A Record of Making Ethnological
Films on Contemporary Arnhem Land Aborigines

Toshio MATSUYAMA

The National Museum of Ethnology dispatched staff to northern Australia during September and October, 1986 to make an ethnological film record of the Djinang tribe, of Arnhem Land.

This article reports on the general process of how this record, especially that of the *Maradjiri* (Star Ceremony), which was performed during the period, was made, edited and released.

The whole record was completed as four separate films;

① “*Maradjiri*-Star Ceremony of Arnhem Land” (2 hours 20 minutes).

Details of *Maradjiri*. Djinang people adore Venus as their mythological ancestor, and worship their ancestor’s spirit in the ceremony;

② “20,000 year-old Rock Paintings of Arnhem Land-Beyond Time” (18 minutes).

Paleo-environmental change is examined from rock paintings in Kakadu National Park. The development of the paintings and the worldview of Arnhem Land aborigines is analyzed from these paintings;

③ “Bungowa returns to the bush-Way of Life in Arnhem Land” (1 hour 40 minutes).

The daily life of contemporary aborigines is presented through a detailed record of the Gamardi Outstation of the Djinang, which was established in 1975; and

④ “Talking Spirits-Songs and Dances of Arnhem Land” (60 minutes).

* 国立民族学博物館第1研究部

Myths regarding “Dreamings” (totems) of the Djinang tribe, which were celebrated by a series of songs and dances during the two weeks of *Maradjiri*, were analyzed through the contents of songs and dance performances.

Mr. Jacky Wunuwun and Mr. Terry Gandadira, from Gamardi Outstation, and Mr. David Bond, of Bawinanga Aboriginal Cooperation, from Maningrida, were invited to the National Museum of Ethnology to complete these films and to verify the suitability of the contents for public release.

- | | |
|---------------------|-------------------|
| 1. はじめに | 3. 撮影隊の役割分担 |
| 2. 星まつり | 4. 編集作業と「みんなく映画会」 |
| (1) マラジリの製作 | (1) 編集作業のあらまし |
| (2) 星まつり | (2) 「みんなく映画会」 |
| (3) 「まつり」の意味と人びとの役割 | 5. おわりに |
| (4) 「まつり」ど食糧 | |

1. はじめに

ジナン Djinang 族は、中部アーネムランドの海岸から内陸にかけての 1800 km² が、本来の居住域である [TINDALE 1974]。しかし、約200人を数える人口のほとんどは、現在マニングリダ Maningrida やラマンガニン Ramingining の「まち」 Aboriginal Town に生活している。伝統的な領域（図1）に建設された「むら」 outstation の居住者は、きわめて少ない。その「むら」のひとつガマディ Gamardi で、筆者らは、1986年9月から10月にかけて、国立民族学博物館の映像音響資料の収集をおこなった。その目的は、変容のはげしいアーネムランド・アボリジニにあって、比較的伝統的な文化を保持する「現代の狩猟民」の民族誌映画を製作することにある。したがって、現地で収集した映像音響資料は、「むら」びとの生活全般におよんでいる。そのなかで、ここでは資料収集の中心となった「星まつり」について報告する。

報告の意図は、収集した資料により多くの情報を加えることと、資料の収集から公開にいたる経緯を記録にとどめることにある。それによって、映像音響資料の有用性がよりたかくなると考えたからである。

松山 アーネムランド・アボリジニ、ジナン族の星まつり

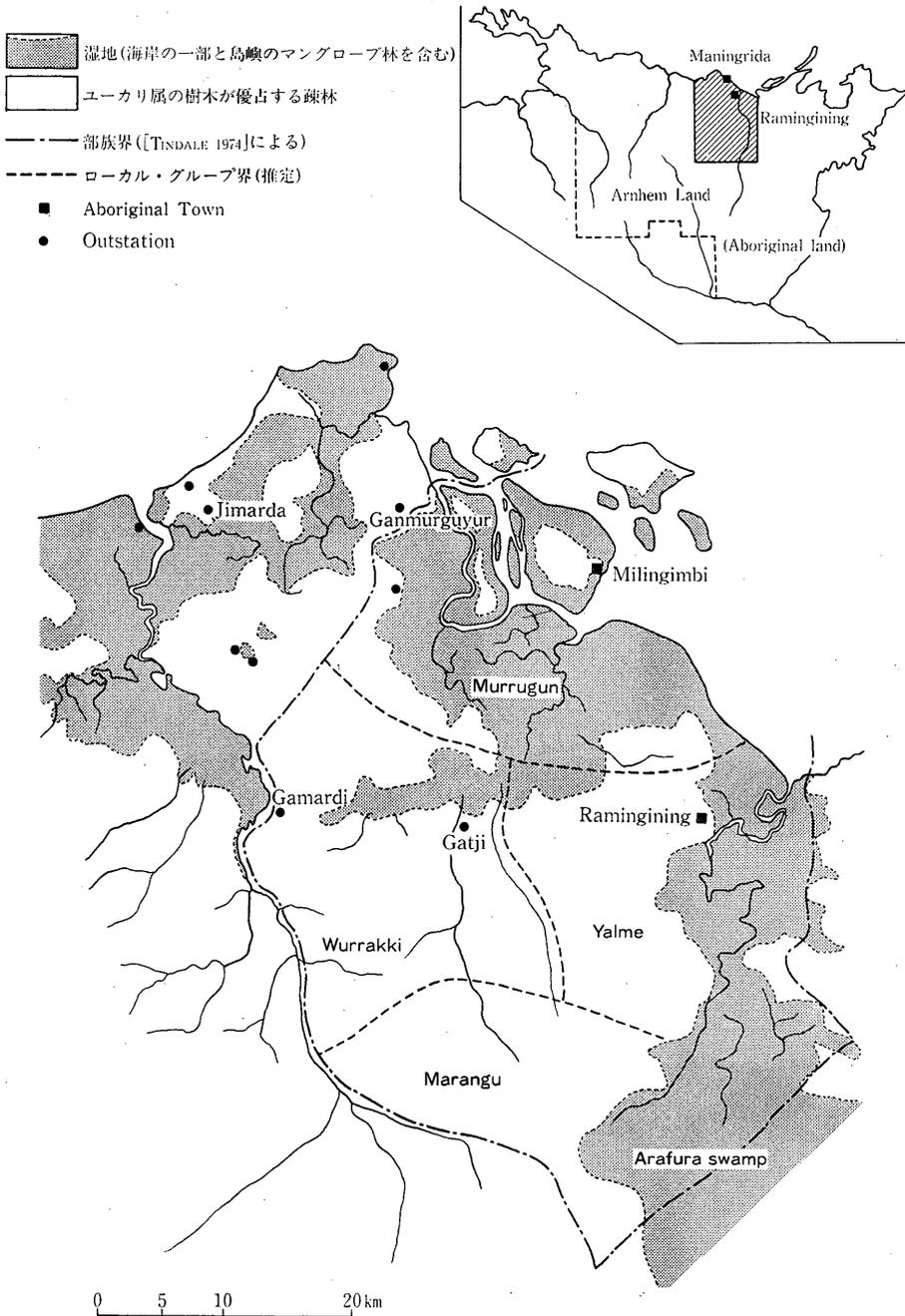


図1 ジナン族の領域

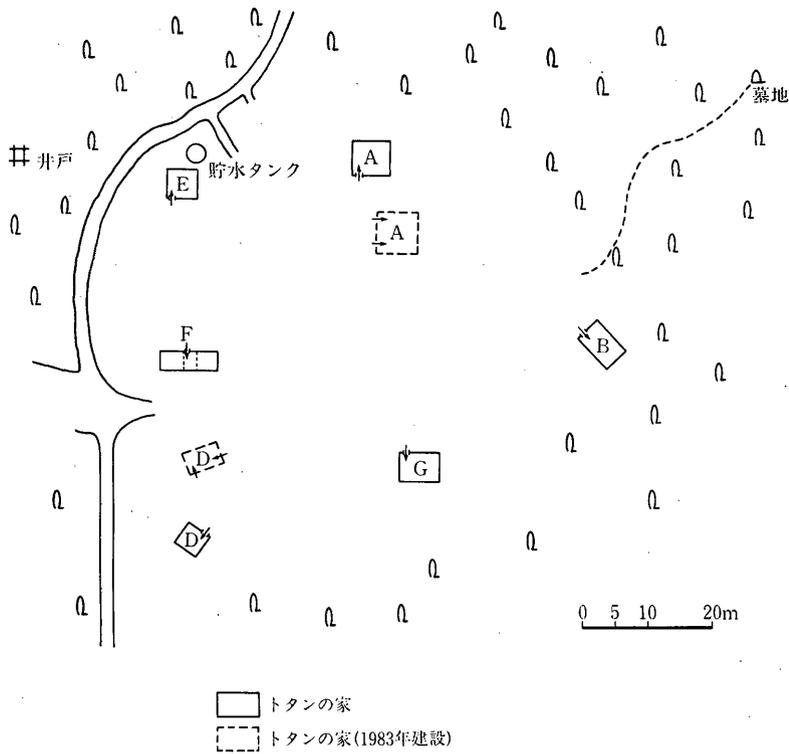
2. 星まつり

ガマディは、ユーカリ属の樹木が優占する疎林にひらかれた、新しい「むら」である。この「むら」のリーダー、ジャッキー・ウヌウン Jacky WunuWun は、マニングリダの「まち」での生活をやめると、1975年、現在地にガマディを建設した。この地域は、ジナン族の一氏族ウラッキ Wurrakki の領域である。ムルゲン Murrugun 氏族のメンバーであるウヌウンは、「まち」での生活をへて、本来の居住地からウラッキの土地へ移住してきた。それが可能であったのは、ガマディを建設したこの土地が、ウヌウンの母（ウラッキ氏族）のゆかりの土地だったからである [松山 1988: 620-621]。

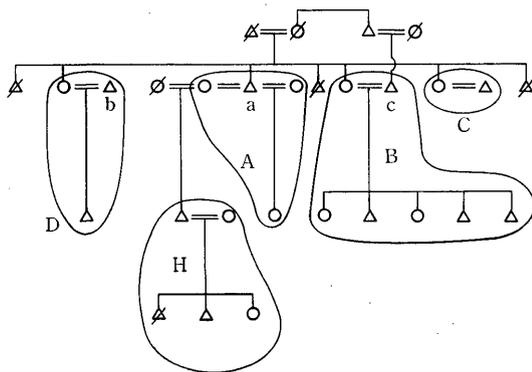
成員20人を数える標準的な規模のガマディでは（図2）、散弾銃と四輪駆動のトラックを用いた狩猟がおこなわれ、食糧の5割を280 km²の領域内で開発している（図3）。残りの食糧は、2週間に1度マニングリダの「まち」から定期的に供給される小麦粉などの、マーケット・フーズに依存する。野生稲やソテツ属の種子など、かつてさかんにおこなわれた植物質食糧の採集には、ほとんど従事しない。彼らは文明の利器を選択的に受容し、採集活動をマーケット・フーズの購入におきかえた「現代の狩猟民」である [松山 1988]。

このガマディ「むら」の主要なメンバーは、ジナン族の一氏族、ドゥア半族のムルゲンに属している。彼らムルゲンの神話上の祖先は、明けの明星バルヌンビル Balununbir である。その星をまつり、祖先の精霊をたたえるのが、この「星まつり」である。この「まつり」は、星の名をとってバルヌンビル儀礼ともよび、また「まつり」がマラジリ Maradjiri（祖先の精霊が宿る柱、詳しくは後述）をめぐるって進行するところから、マラジリの儀礼ともよばれる。いずれにしてもこの「星まつり」は、近年になって頻繁にもよおされるようになった。それは、「まつり」のなかで彼らのドリーミング（トーテム）をうたいおどることによって、それぞれに自己のアイデンティティを確認するためである [BORSBOOM 1978: 15-17]。

筆者らが資料収集をおこなったガマディの「星まつり」は、「まち」や「むら」に暮らすムルゲンとその近縁の親族をよびあつめることから始まった。彼らのドリーミングのうたい手・おどり手をあつめ、彼らの祖先の精霊が宿るマラジリをつくるためである。



貯水タンクと井戸(1986年完成)、風車でくみあげた水をパイプで貯水タンクへおくる。
EとGは空房。Fはマーケット・フーズを一時的に貯蔵したかつてのshop。



A~D,H 居住家族
(HはジマラJimarda「むら」に、
Bはマニングリダ Maningrida
に本拠地をおく。Cはトタンの
家をもたずテント生活)

- a Jacky WunuWun
- b Johnny BulunBulun
- c Michael Narapya

図2 ガマディ「むら」の成員と居住家族

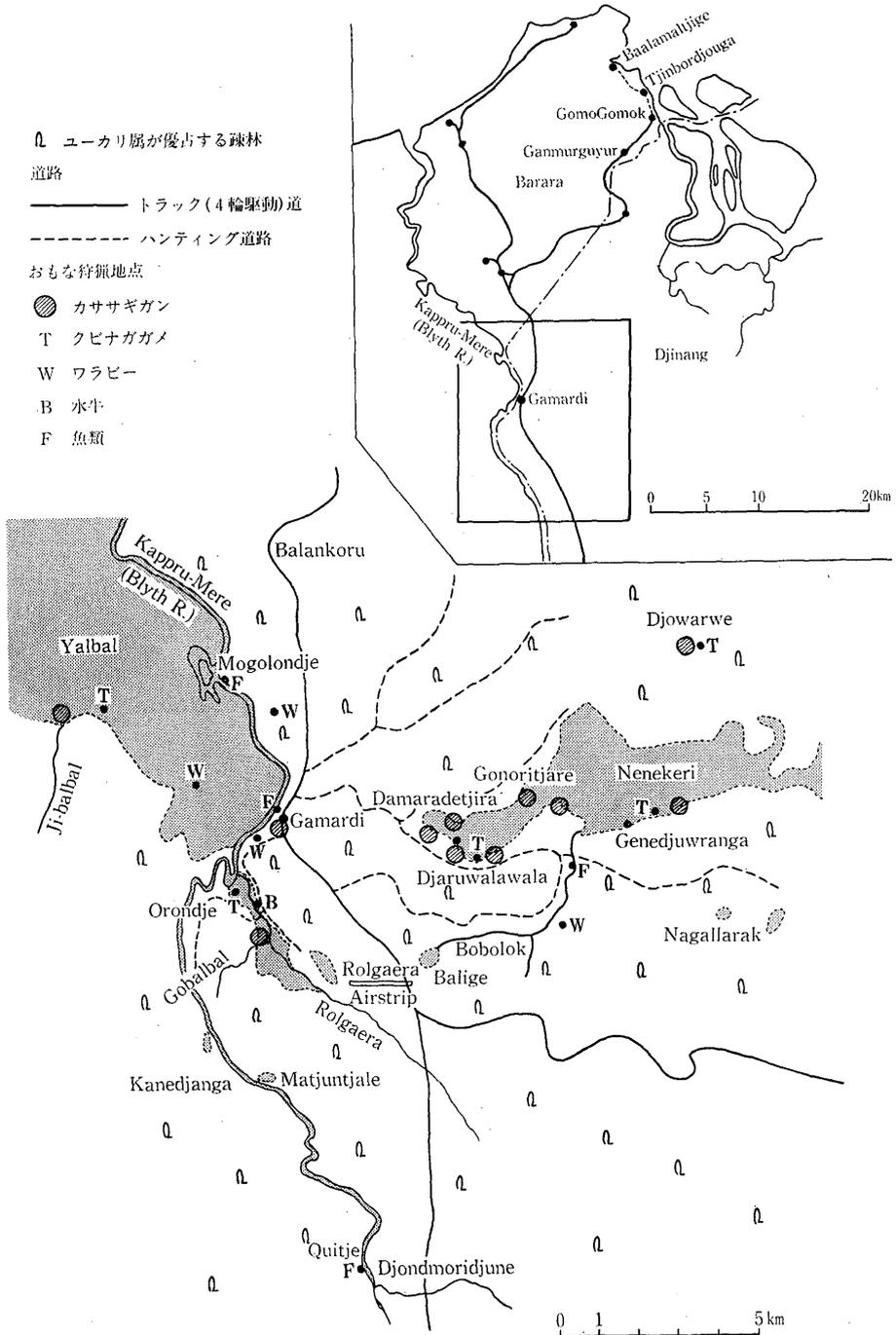


図3 ガマディ「むら」の領域とおもな狩猟地点

(1) マラジリの製作

ガマディのリーダー、ウヌウンからの無線電話を9月26日にうけた人びとは、翌27日から30日にかけてあつまりはじめる。10月1日には「むら」にもどった成員18人に22人の人びとが加わり、人口は一挙に3倍に増加する（表1）。この22人の人びとは、ウヌウンとマイクル・ナラピア Michael Narapya 老人（ウヌウンの母方の交叉イトコ）、それにウヌウンの姉の夫、ジョニー・ブルンブルン Johnny BulunBulun の3人それぞれの近縁の親族である（図4）。あつまった22人は、親族関係の遠近に応じて、この3人の男の家のまわりにわかれてキャンプする。

人びとがあつまりおえた10月1日、ブルンブルンは若者を指揮して、伐りたおしたユーカリ属の木で3×3mをおおった一時的な陽除け小屋（セレモニーハウス）を、集落から85m離れた西南の疎林のなかにつくる。ここではまつりのための一切の準備がおこなわれ、彼らの祖先の精霊が宿るマラジリ（これを御柱と訳すことにする）がつくられる。女性には、御柱づくりの作業をみせてはならないからである。

御柱の伐りだし その前日の午後、ゴバルバル Gobarbal の河辺林（亜熱帯降雨林）から、御柱が伐り出される。若者数人をしたがえたウヌウンは、あらかじめ見定めておいた比較的まっすぐな木（ワラワラ Wala-wala ジナン語）を伐りたおす。若

表1 「星まつり」期間中の人口

月 日	ガマディの 成 員	参 加 者	計	参加者の生活の本拠		
				マニン グリダ	ラマン ギニン	そ の 他
9. 26	11	2	13	2		
27	11	12	23	4	6	
28	11	12	23			
29	11	12	23			
30	18	19	37		4	3
10. 1	18	22	40	3		
2	18	22	40			
3	18	22	40			
4	18	22	40			
5	18	22	40			
6	18	22	40			
7	18	22	40			
8	18	22	40			
9	18	25	43		3	
10	15	20	35			
11	15	17	32			
計				9	13	3

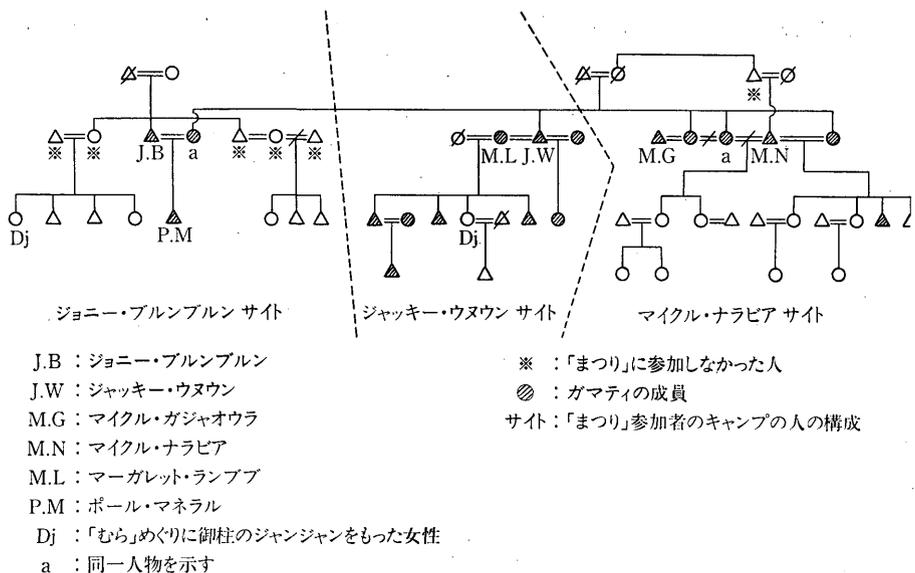


図4 「星まつり」にあつまった人びと

者は陽除け小屋がつくられるはずのユーカリの疎林に、このワラワラの木をはこびこむ。

翌10月1日の午後、陽除け小屋のかたわらに火をおこすと、ウヌウンの妹の夫、マイクル・ガジャオウラ Michael Gadjaowra はワラワラを火にかざし、表皮をとりさり（写真1）、根元のまがりを矯正する。ついで2日の午前中に紙ヤスリで表面をみがき、伐り出した木の根元（御柱の頂部になる）約 30 cm を残して赤オーカーをぬ



写真1 ワラワラ Wala-wala の幹をみがくマイクル・ガジャオウラとその撮影風景

松山 アーネムランド・アボリジニ、ジナン族の星まつり

る。この時点でワラワラは御柱にかわる。伐り出してからはじめて、祖先の精霊や彼らのドリーミング（トーテム）をたたえるうたとともに、御柱づくりの作業が進行しはじめるからである。

御柱づくり 10月2日午前、御柱に赤オーカーが塗られはじめると、陽除け小屋にあつまった若者は、「糸」「赤い羽」「白粘土」「赤オーカー」「ベンガル・ボダイジュ」「精霊の道」をうたう。御柱には、ベンガル・ボダイジュの根の皮の繊維をつむいだ糸を、赤い羽・白い羽とともにびっしりまきつける。そのうえを赤オーカーと白粘土の絵具で、交互にぬりわけていくのである。彼らは御柱に使う「もの」と、祖先の精霊の物語をうたう。御柱が完成すると、そこには「まつり」にあつまったすべての人びとの祖先の精霊が宿るはずである。

この日の午後、御柱に使用する白い羽を得るため、ガジャオウラはトキとサギ狩りに、乾季のこの時期にも水の残るボボロク Bobolok へ出かける。陽除け小屋に残った若者はうたいづける。彼らは「東風」「野火」「神話時代の少年」「ツル」「ハス」「ペリカン」「カモメ」「小魚」「神話時代の男」「海鳥」「水草」「マカッサン・ボート」「草原の鳥」とうたいついでいく。

「東風が吹き、おおきな野火がおこる。神話時代の少年は旅をし、ツルはハスの実を食べる。ペリカンやカモメは小魚をおい、神話時代の男はヤリをかまえて魚をさがす。潮が満ち、なぎさの海鳥は島をめざして飛びたつ。水草がゆれる。マカッサン（マレー系漁民。スラウェシ島、マカッサル地方から来たためであろう）がボートをこいでやってくる。草原の鳥が飛びたつ。」

おおよそ、こういう物語を若者はうたう。

この日の夕方、太陽が沈み摂氏40度をこえる日中の暑さがいえると、人びとは白粘土を手で体にぬり、初めて「むら」の広場でおどる。男女あわせて10人のおどり手は、「明けの明星」「チョウ」「ベンガル・ボダイジュ」「カンガルー」をおどる。祖先の星や動植物のおどりには、それぞれに意味がある。たとえばチョウのうたは、おおよそつぎのような内容をうたいおどる。

あざやかな色の 羽をとじひろげ

まいおどり 水辺の木に休む

水辺にたわむれ 水をのみ

まいあがる

私の国はワラウォルワ

ワラウォルワからやってきた

私は舞う、空に舞う
御柱と美しさをきそう

人びとはうたにあわせて手を閉じひろげ、
空に舞う。彼らはチョウになりきるの
である。

10月3日午前10時、陽除け小屋にあつ
まったウヌウンと若者は、今日もまた
「赤い羽」「御柱」「糸」「精霊の道」を
くりかえしうたう。ガジャオウラはこの
うたにあわせ、昨日のうちに赤オーカー
をぬりおえた御柱にたんねんに糸をま
いていく(写真2)。この糸はラマンガニ
ンの「まち」のアート・クラフト・セン
ター(アボリジニの工芸品を買い入れて一
般に紹介するとともに、彼らの製作技術
を指導する施設)で、この「星まつり」
のためにブルンブルンが購入したもので



写真2 御柱に糸をまくマイクル・ガジャオウラ

ある。この糸に、彼が大切に保管していた古い御柱からはずした糸が加えられる。糸
まきの作業はうたとともに進行する。「むら」に残った女性は、このうた声で作業の進
みぐあいを推察する。



写真3 白粘土ほり



写真4 白粘土を古い蚊帳で濾して絵具をつくる

午後は、うたを中断して、白粘土ほりにでかけることになった。御柱にぬり、ポディー・ペインティングに使用する白粘土がたりないというのである。ウヌウンはガジャオウラと3人の若者をともない、自ら四輪駆動のトラックを運転して「むら」から30 km 北方の採掘地へでかける。ゴウルゴウルンガ GowurGowrunga とよぶこのジナン族の土地には、2 m ほどの深さに穴がほられている。近隣の「むら」びとも、白粘土とりにはここにあつまらしい。ウヌウンらは、20分ほどで 1.8 l 缶に1杯の白粘土をほりおえた(写真3)。

「むら」にもちかえった粘土は水にといてくりかえし濾過し(古くなった蚊帳をつかう)、不純物をとり除いて絵具に用いる(写真4)。しかし今回は、粘土のかたまりを石のうえでこまかく砕き、それを水でといて使うことになる。

さて、御柱に糸をまきサギやトキの白羽とインコの胸の赤羽をとりつける作業は、翌日もうたとともに終日つづけられる。これがおわったのは、10月9日の午前11時である。断続的につづいたこの作業には、ガジャオウラ1人がたずさわり、延べ5日間、約13時間をついやした。その間、日中は陽除け小屋で男たちがうたい、夕刻からは「むら」の広場でおどりが毎日くりひろげられる。

10月4日の夕方、男女あわせて17人の「むら」びとは、赤オーカーのうえに白粘土をぬり、ピンク色に全身を化粧する。そして約90分間、ディジェリドゥ (didjeridoo 木製のラップ) とクラップ・スティック (拍子木) に合わせて、「ガン」「日本人」「タバコ」「チョウ」「ベンガル・ボダイジュ」「フクロウ」をおどる。このおどりには相互に脈絡がない。「ガン」は、草を食べ、湿原をとびまわり、卵を生み、ひなを育て

るカササギガンをうたう。「日本人」は、銃にみたてた棒を肩に2列になった男たちが第二次世界大戦（日本がアーネムランドを爆撃したのは1942年）の様子をおどる。「人びとは戦争をはじめ、いろいろな国と戦う。銃をもって、いままきに戦う」とうたう。やがて戦争がおわり、休息する白人にタバコをねだる。これが「タバコ」のうたであり、手のひらをうえに、左右の腕を交互にさし出してタバコを乞うおどりである。

この「タバコ」と、彼らが「日本人」とよぶうたは、ウヌウンの姉の夫ブルンブルンが属するジンバ Djinba 族ゲナルピング Guanalbingu 氏族をはじめ、アーネムランド東部に特徴的である。「むら」びとたちは、そのうたとおどりを日本の撮影隊にサービスしてくれたのである。

この翌日（10月5日）からは、夕方から夜にかけて、彼らの神話に登場するさまざまな動植物のおどりが、「むら」の広場でくりかえされる。そのおどりの曲目をかかけておこう。

- 5日 17時35分から18時、「水鳥」「クモ」「汽水の魚」「ヤムイモ」「ヤリ」。おどり手は男のみ7人。
- 6日 21時10分から22時30分、「精霊」「ベンガル・ボダイジュ」「ヤムイモ」「カンガルー」「ツル」。おどり手は男7人、女6人。
- 7日 18時20分から20時、「精霊」「明けの明星」を2度ずつと「カンガルー」。おどり手は男8人、女5人。

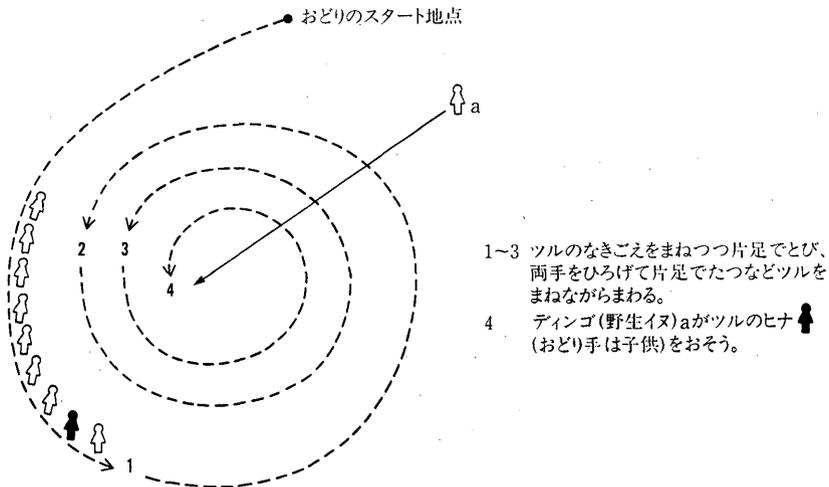


図5 ツルのおどり

松山 アーネムランド・アボリジニ、ジナン族の星まつり

これらは、神話の内容にあわせてテンポをかえ、全身を躍動させておどる。その動きを「ツル」を例にみると、つぎのような意味のうたにあわせて図5のようにおどる。

ツルが歩く ツルが歩く うたいながら
巣をつくり 卵を生むために
ツルが歩く うたいながら
リチア*の季節 ヒナはかえり たちあがる
夕ぐれにとびたち とびまわり うたう
ツルが歩く ツルが歩く クワイの根をほる
コルプルンガの湿原で
羽が風にまう

1曲おわるたびに、おどりに加わらなかった男女から、「ヨー」と声がかかる。夕方のおどりは、日を追って熱気をましてきた。

(2) 星まつり

陽除け小屋（セレモニー・ハウス）での御柱づくりもおわりにちかい。9日午前11時、御柱の糸まきと羽つけがおわる。とりつけられた羽はほぼ 15 cm 間隔に、御柱

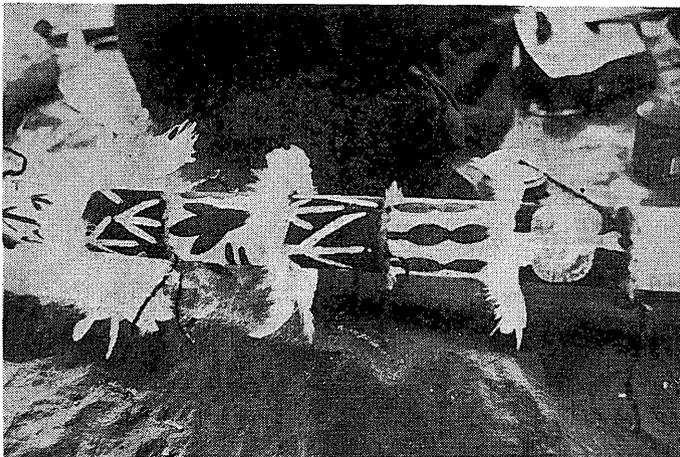


写真5 御柱に描かれたドリーミング（トーテム）の動植物。右からチヨウ、野生イモ、トキ、ヤムイモ、トキ、ツル

* リチア 雨季のおわりから乾季のはじめの季節

の頂部からインコの赤羽15とサギやトキの白羽14が交互にならぶ。その間を、赤オーカーと白粘土で紅白にぬりわけていく。そのうえから、ナラビア老人はツルとペルペルペという草原の鳥を、ブルンブルンはミツバチ、トンボ、チョウ、ヤマイモ、トキを、白地のところには赤オーカーで、地の赤い部分には白粘土で描いていく(写真5)。それぞれのうたとともに御柱の下方からランダムに描いていった模様は15カ所、御柱の半分をうめた。

午後3時、ナラビア老人は、陽除け小屋にあつまった若者の体にツルのペインティングをはじめ。ビニールシートのうえにあおむけにねた若者の体に、胸から二の腕と腹部にかけて筆で赤オーカーをぬる。ついで白粘土で輪郭をととのえ、二の腕と腹部を白粘土でぬりつぶす。二の腕はツルの翼を、腹部は胴体をあらわしている。描きおえた若者は、口に含んだ白粘土を顔と首すじにふきつけてもらい、眉間から鼻すじに指につけた赤オーカーで筋を描き入れる(図6)。こうして若者はツルに変身し、羽にみたてたユーカリの小枝を両の腕にとりつける。ナラビア老人は6人の若者をつぎつぎとツルにしたてる。残りの若者とナラビア老人、それにウヌウンとブルンブルン、ガジャオウラは全身に赤オーカーをぬり、そのうえから指につけた白粘土を点々とつける。体につけた白粘土は、風にゆれるツルの羽をあらわしている。彼らもまた、このペインティングでツルにかわるのである。

約1時間30分のペインティングで変身した男たちは、やがて一団となって陽除け小屋をでる。このツルの一団は、ウヌウンのクラップ・スティックとナラビア老人のディジェリドゥに導かれて、「星まつり」にあつまってきた人びとのキャンプを順におどりめぐる(図7)。彼らは、神話時代のツルが棲むべき湿地をさがして旅をつづけ、最後に棲息地をみいだす物語を再現しているのである。ツルの一団がおとずれると、女たちは小麦粉や缶詰をささげる。ガジャオウラと、ブルンブルンの息子ポール・マネ

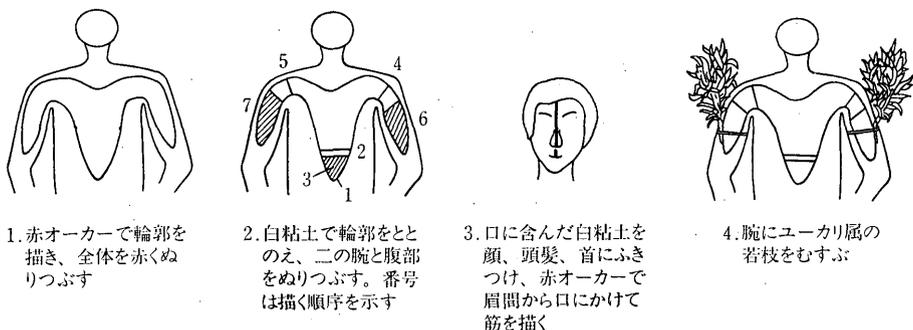


図6 ツルのボディー・ペインティング

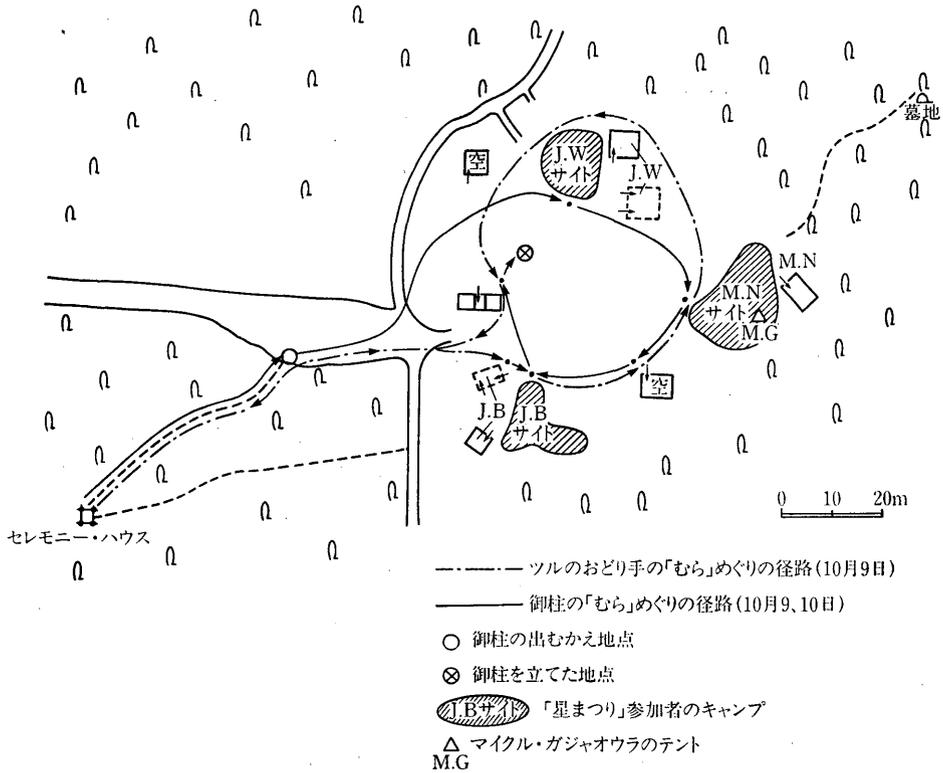


図7 「むら」をめぐるツルの一団と御柱のコース

リル Poll Manerir がその供物をうけとる。一団は最後に筆者らのテントにもやってきた。筆者らも「まち」で買っておいた小麦粉2袋に数個のコンビーフ缶、日本からもっていった粉末ウイスキー1袋と十数枚の T シャツをささげる。

「むら」をおどりめぐり神話を語りおえたツルの一団は、男たちだけで供物を即座に配分する。粉末ウイスキーはウヌウンとブルンブルンが半分ずつわけ、T シャツは若者たちがもちかえた。この配分は実にすばやくおこなわれ、小麦粉や缶詰を誰がいくつうけとったのかは記録できなかった。

この日(9日)の夕方、ウヌウンのクラップ・スティックとナラビア老人のディジュリドゥにあわせて、15人の男女が「むら」の広場でふたたびおどりはじめる。彼らは「海鳥」「ヤリ」「ヤムイモ」「ベンガル・ボダイジュ」「チョウ」「ツル」「草原の鳥」をおどる。これをおえた午後9時、ナラビア老人と若者は陽除け小屋にあつまり、御柱のはこびだしにとりかかる。いよいよ御柱が女性にも解放されるのである。ウヌウンとブルンブルン、ガジャオウラは、女性たちとともに疎林のきわで御柱をでむかえ

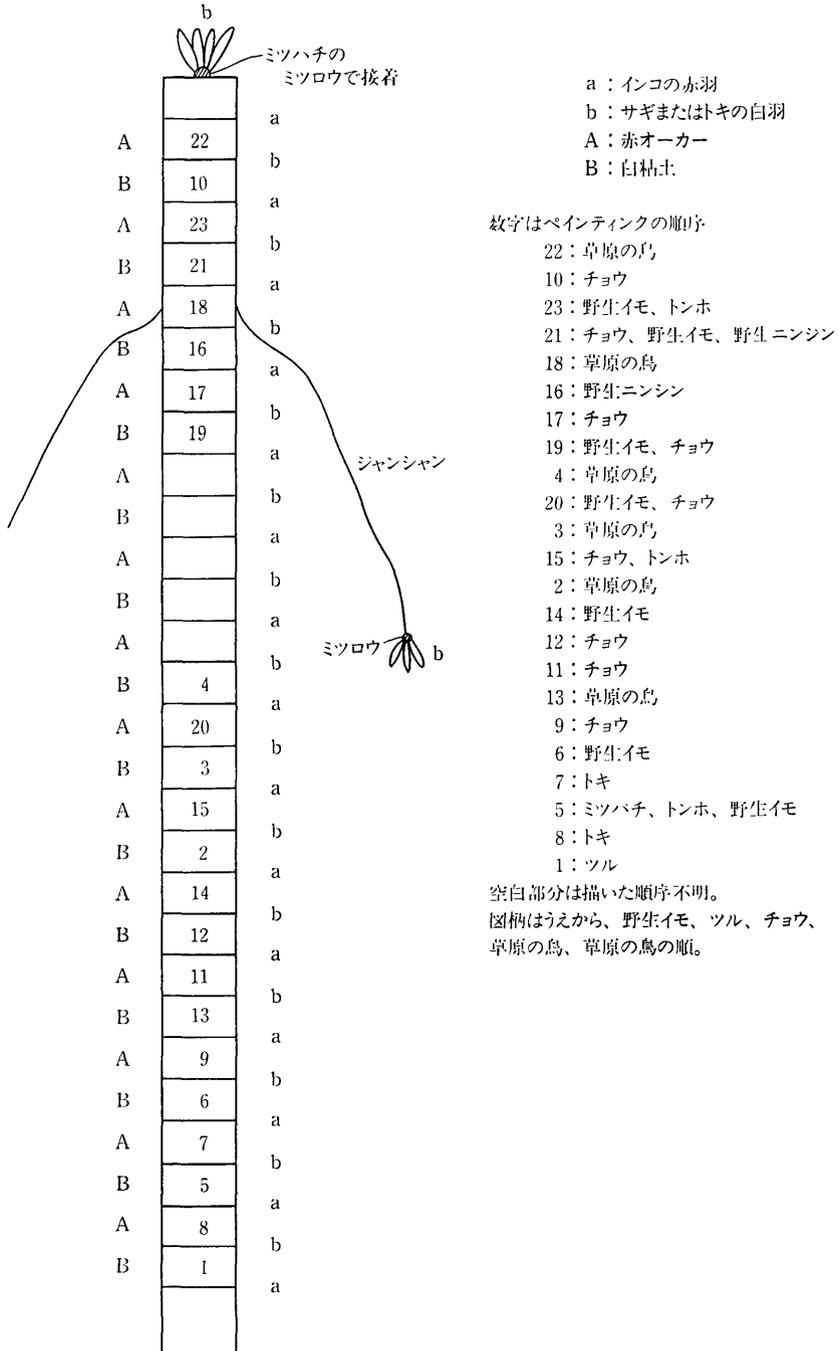


図8 完成した御柱

る。

ウヌウンのクラップ・スティックと「明けの明星」のうた、そしてナラビア老人のディジェリドゥに先導されて、ブルンブルンと若者にになわれた御柱は、「むら」の家いえとキャンプをおどりめぐる。おどり手のあげる土ぼこりと、おどりにつれて激しく上下にゆれる御柱が「むら」をめぐる。ジャンジャン Djang-djang とよぶ御柱にとりつけられた2本の長い糸は、ウヌウンの亡くなった妻の娘マバルク Mabaruku (ドゥア半族) とブルンブルンの姉の娘ミルミル Mirrmirr (イリチャ半族) がもち、男たちとともにおどりめぐる。こうして家いえとキャンプをめぐった御柱は、広場の中央にたてられる。そのまわりで「明けの明星」「ベンガル・ボダイジュ」「チョウ」

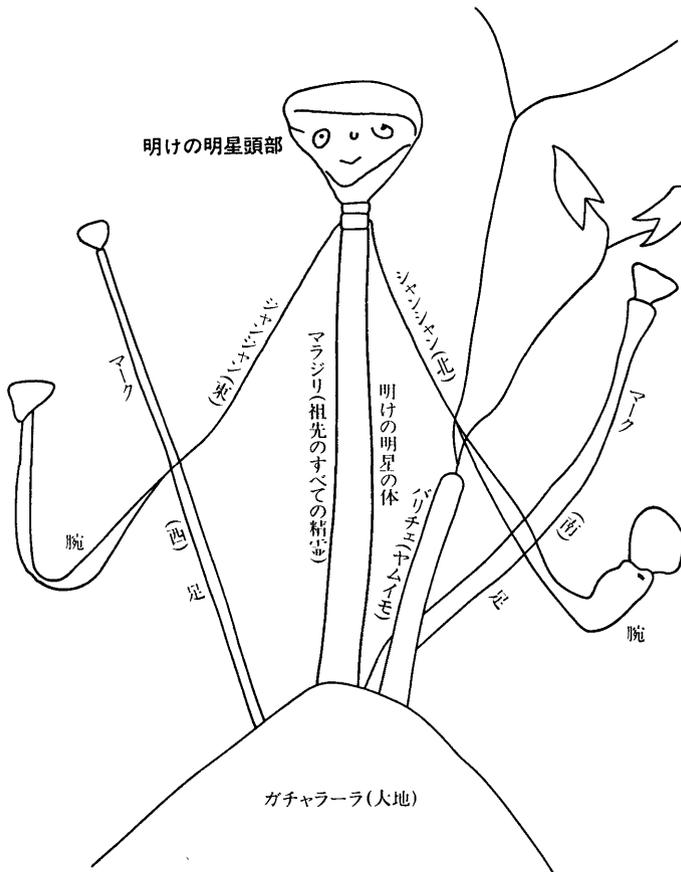


図9 大地ガチャラーラに立つ御柱マラジリ

ジナン族は、マラジリを人形とみる。マークは、マラジリの開始をつけるためにかつて使用されたメッセージ・スティックである。これにもマラジリと同じ装飾が施された。

「精霊」をうたいおどる。御柱の「むら」めぐりは、午後9時30分におわる。

星まつり当日 人びとが眠りはじめた9日の午後11時、ガジャオウラのディジェリドゥとウヌウンの低いうた声が「むら」にひびく。2人は「明けの明星」「海」「ペリカン」「魚」「海草」「糸」「カヌー」と、0時すぎまでうたいつづける。御柱はひそかに陽除け小屋にはこばれる。

10月10日午前5時、マンバリラ Manbarira 老人のうた声がおこる。彼は昨夜ランギニンの「まち」からトラックで駆けつけていた。そのうたを合図に起きた男たちは、疎林のきわにあつまる。ナラビア老人とガジャオウラは、昨日描き残しておいた御柱の上半分に、チョウやヤムイモ、トンボ、野生のニンジンと彼らがよぶ根茎、草原の鳥をうたとともに約1時間で描きあげる(図8)。御柱はようやく完成する。

ブルンブルンとガジャオウラ、若者になわれた御柱は、再びウヌウンのクラップ・スティックと「明けの明星」のうた、そしてナラビア老人のディジェリドゥに先導されて「むら」にはこばれる。御柱マラジリは、祖先の星である金星がすむべき大地を求めて東から西へ旅する様子を、「むら」のキャンプをめぐることで再現する。やがて御柱は、彼自身がすみ、「むら」びとの祖先の精霊がすむ大地、ガチャラーラ Gatjalala をみいだす(図9)。この大地ガチャラーラは、彼らのドリーミング(トーテム)である数多くの動植物が棲息し、「むら」びとがいまも暮らす土地である。昨日と今日の2度にわたる御柱の「むら」めぐりは、人形をした御柱マラジリの天地創造の神話を再現していたのである。

広場に立った御柱のまわりで、人びとは「精霊」「ベンガル・ボダイジュ」をうた



写真6 「星まつり」最終日、御柱をかこんで「精霊」のおどりをおどる人びと

いおどる(写真6)。これは精霊をたたえ、精霊のためにベンガル・ボダイジュの実をつむおどりである。このおどりをおえた午前8時、「星まつり」はおわる。御柱は、明朝までそのまま「むら」の広場に安置される。御柱に宿った祖先の精霊がガチャウラを旅するからだという。彼らは、旅をおえた精霊が明朝この御柱にもどるまで、御柱マラジリを立てておくのである。

(3) 「まつり」の意味と人びとの役割

この「星まつり」を人についてみると、各人の役割が明らかになる。まず、ガマディ「むら」のリーダー、ウヌウン(ドゥア半族)は人びとをよびあつめ、若者を指揮して御柱を伐りだす。こうして彼は「まつり」の開始を告げる。「まつり」がはじまると、ウヌウンはクラップ・スティックを打ちながらうたうべきうたとおどりを決定し、「まつり」を組み立てていくのである。その割合は、すべてのうたとおどりの85%に達する。この「星まつり」は、ウヌウンが演出していたのである。

ウヌウンが演出者だとすれば、ブルンブルンとガジャオウラ(ともにイリチャ半族)は、この「まつり」の主演である。この2人がもっとも主役らしい役割を演じたのは、「星まつり」当日の10月9日と翌10日である。この両日、ブルンブルンとガジャオウラは御柱をにない、若者をしたがえて「むら」をおどりめぐり、天地創造の神話を再現するからである。

彼らが主要な役割を演じたのは、「まつり」当日の2日間だけに限らない。準備段階でも、ブルンブルンは「まち」や「むら」へ人びとをあつめにでかけ、若者を指揮して陽除け小屋をつくる。御柱にまく糸を購入し、不足分は彼が大切に保管していた古い御柱からはずして提供する。そして完成まちかい御柱に、草原の鳥や湿原の鳥を描くのである。一方、ガジャオウラは御柱の製作を一手にひきうける。彼はワラワラをみがきあげ、赤羽用のインコを狩り、白羽用のサギやトキを狩る。御柱に糸をまき羽をつけ、紅白にぬりわけ、彼らのドリーミング(トーテム)であるヤムイモやトンボなどを御柱に描き入れる。この作業をブルンブルンと交代したのは10月9日の午前だけである。この日ガジャオウラは、もう一度サギ撃ちにでかけたからである。さらに、ブルンブルンとガジャオウラは、毎日おこなわれた夕方のおどりをリードする。こうしてこの2人は、「星まつり」を実質的に支え、演じたのである。

この2人に対して、ナラビア老人(イリチャ半族)は「まつり」の重要な節目だけに登場する。ウヌウンとともに伝統文化のにない手である彼は、ドリーミングの動植物を御柱に描き入れ、若者をツルに変身させるボディーパーペインティングを担当する。

彼らの重要なドリミングのひとつツルのおどりではヒナをおそうディンゴ(野生犬)を、カンガルーのおどりでは若者が扮する狩人にとりかこまれたカンガルーをおどる。ナラビア老人がおどったのはこのふたつだけで、それ以外はウヌウンのクラブ・スティックにあわせてディジェリドゥを演奏しつづけた。

ガマディ「むら」の「星まつり」は、2人のオールド・マン(ウヌウンとナラビア)とミドル・マン(ブルンブルンとガジャオウラ)を核に、若者と女性に加わっておこなわれていたのである。こうした人の構成は、中・西部アーネムランドの「星まつり」に一般的である[BORSBOOM 1978]。

ところで、この「星まつり」は、ガマディ「むら」の成員とその近縁の人びとによって、筆者らの映像音響資料の収集のために催された。通常の「星まつり」では、製作した御柱を特定の受け手の「むら」にはこび、さきの「まつり」の最後の2日、つまり御柱の「むら」入りの部分が演じられる。撮影隊のために催してくれた今回のこの「星まつり」では、それを一連のものとしてガマディでおこなっている。これが通常の「まつり」とおおきく異なるところである。それでもなお人の構成とその役割には、通常のものとの間に違いはなかった。

さて、現在の「星まつり」は子供の成長にかかわって催されることが多いという。筆者らが撮影をおえた2週間後、このガマディでナラビア老人をめぐっておこなわれた「星まつり」を例にとると、「まつり」を催す契機はつぎのように説明される。

ある日(日時は不詳)、ナラビア老人は娘のロビンと2才になる孫のサイモンらと釣りにでかける。この時サイモンは釣りあげた1尾の魚を手でつかんだ。その魚は、この子が生まれて最初につかんだものだという。これをみたナラビア老人はその魚の骨片を、アーネムランド東部のアボリジニの「まち」ガプウィヤク Gapuwiyak にすむ遠い親族に送り、「星まつり」をしてくれるように頼んだのである。ガプウィヤクの人びとは御柱を製作しガマディにはこびこんで、2日間「まつり」をおこなった。その費用1000ドル相当は、ナラビア老人をはじめとするガマディ「むら」の人びとが、毛布やマーケット・フーズで負担する。ナラビア老人はガマディの成員だからである。そしてなによりも、彼にかかわる「まつり」をつうじて、ガプウィヤクとガマディの人びとの間の親密な関係が確認できたからである。

かつては2度めの葬送儀礼(アーネムランド・アボリジニは死亡直後に遺体を埋葬する儀礼と、その後数年して死者の骨を砕き円筒状の柩に入れる2度の葬送儀礼をおこなう)のあと死者の骨片を送り、「星まつり」をすることで精霊をたたえた。それがいまでは、幼児が最初に出会う儀礼へと変化したのである[BORSBOOM 1978: 172

-174]。そのためこの「まつり」は、Birth Ceremony ともよばれることがある。食糧獲得活動から採集が脱落したように、「星まつり」もまた、おおきく変容しつつある。

(4) 「まつり」と食糧

筆者らが撮影した「星まつり」は、乾季の2週間にわたっておこなわれた。その間「むら」の人口は、「まつり」直前の3倍に増加する。この急増した人口を支持するため、人びとはふだんにも増して頻繁に狩猟にでかけることになる。「むら」の人口が10人程度の通常の時期、狩猟はほぼ2日に1回がふつうである。しかし、「まつり」期間中は3日に2回の割に増加する。捕獲動物は、湿地のカササギガンと疎林のワラビーである。

「星まつり」期間中の主要な食糧となったガンとワラビーの狩猟地は、ネネケリ Nenekeri 湿地と「むら」の北の疎林である。そのなかでも、ネネケリ湿地で散弾銃を用いておこなうカササギガンは効率がたかく、1人当たりの平均可食食糧はもっとも多い[松山 1988: 630]。しかし、その主要なハンターは予想に反して若者ではなく、「星まつり」を実質的に支えたミドル・マンのブルンブルンである。「まつり」のあい間をぬって彼が捕獲したガンは、この期間の総数の5割に達し、そのうちの7割をあつまった人びとに配分する。ブルンブルンは、食糧の確保においても、この「まつり」を支えていたのである。

これに対して、女性はこの期間の食糧獲得にほとんど貢献しない。植物質食糧を「まち」から供給されるマーケット・フーズにおきかえたため、女性に残された食糧獲得の活動は、湿地周辺でのクビナガガメ狩りだけになった。しかし、その狩猟効率は、ガンにくらべて著しく低いからである。

一方、マーケット・フーズは食糧供給トラックから買い入れる。期間中1度だけ、10月4日の夕方にマニングリダの「まち」からガマディをおとずれた食糧供給トラックでの買い物は、あまり多くない。このトラックからの食糧購入には、失業保険などとして政府から2週間に1度の割合で支給される社会保障金をあてている。「まち」や「むら」からガマディにあつまってきた人びとは、そのお金をもたない。登録された「まち」や「むら」に、彼らのお金がとどまっているからである。

この日、野生食糧に匹敵するほどのマーケット・フーズを買い入れたのは、ウヌウンの第二夫人、マーガレット・ルンブプ Margaret Lunpupu だけにとどまった。彼女が購入したのは、野菜入りソーセージ缶とコンビーフ缶各3個、食パン3袋、砂糖

・小麦粉各1カートンなど12品目100ドルである。彼女を除くガマディ「むら」の人たちは、小麦粉2袋、砂糖1袋などとわずかの缶詰を購入したにすぎない。これらのマーケット・フーズは居住家族での消費が原則で、近縁の親族にもほとんど分け与えることはない。これが野生食糧との基本的な違いである。

社会保障を中心として展開しつつある現金経済は、食糧の消費をめぐる居住家族の個別化をもたらしつつある。その傾向は、木皮画（ユーカリ属の樹皮にオーカーなどで描いたアーネムランド・アボリジニ独特の絵画）や彫刻などを売却してえた収入の場合に、より顕著にあらわれる。たとえば、ウヌウンとともにすぐれた木皮画家の一人であるブルンブルンは、木皮画による収入を小型発電器とビデオ・セット、冷蔵庫の購入にあてている。彼はいま、ガマディ「むら」における最大の保有財産家である。同じようにウヌウンは、木皮画の収入で四輪駆動のトラックを購入している。ガマディではいま、現金経済をひとつの契機にして、居住家族ごとに世帯経済の個別化が進行している。

「星まつり」の執行には長老の権威が生き、「まつり」を維持するための食糧獲得にはミドル・マンが活躍する。獲得した食糧は、必ずしも平等ではないが、「まつり」に参加した人びと全員に配分される。その一方で、マーケット・フーズには消費単位の個別化が進行している。筆者らが収集した「星まつり」を中心とするガマディ「むら」の映像音響資料は、伝統文化をつよく意識しながらも変容しつつあるアーネムランド・アボリジニ社会の現状を、克明に記録しているはずである。

3. 撮影隊の役割分担

この「星まつり」をはじめガマディ「むら」の日常生活の撮影は、国立民族学博物館が委託したNHK サービスセンターの諸氏によっておこなわれた。それは概略表2のように日をおってすすめられた。撮影の役割分担は次のとおりである。

撮影・構成：上野弘也

照明・製作進行：井ノ本清和

録音：勝谷健司

現地での撮影指導には国立民族学博物館の情報管理施設、田上仁志があたった。同時に彼は、「星まつり」のうたとおどりを映画の撮影と並行してビデオに録画し、後刻それをモニターで「まつり」に参加した人びとに公開した。その意図は、彼らに撮影内容を確認してもらうことにある。映像音響資料収集の目的を理解してもらい、人

表2 儀礼の進行と撮影の記録

日	時刻	こと が ら	撮影したおもなことから
9/26	17:00	(撮影隊ガマディ入村, 撮影開始)	<ul style="list-style-type: none"> • 交信する J. W. • 木皮画を描く J. B.
27	午後	儀礼参加者をピック・アップにウレジェ, ダムダム, ジマラ, メルウェンビの各アウトステーションへ	<ul style="list-style-type: none"> • ガマディに近接するアウトステーションとそこに生活する人びと • ガマディにあつまる人たち • 夜のキャンプ風景
28			<ul style="list-style-type: none"> • ダンパー (小麦粉のあつ焼) つくり
29			<ul style="list-style-type: none"> • ギース料理 • 早朝の「むら」の風景 • J. B. 一家の朝食 • ゴバルバルでの水くみ
30	14:00-16:00	ラマンガニンの Art Craft Center で 儀礼用の糸購入	<ul style="list-style-type: none"> • マラジリのための糸をとる J. B. • 若者の踊り • 定点撮影 • 「むら」のそうじ
	12:00-14:00	ガジャオウラ, インコ狩り	<ul style="list-style-type: none"> • インコの羽とり
	14:40	J. W. ほか, ワラワラの伐採	<ul style="list-style-type: none"> • ワラワラの伐採
10/ 1	9:50-10:40	J. B., ガジャオウラと若者, 儀礼用の陽よけつくり	<ul style="list-style-type: none"> • 陽よけつくり ・「むら」の様子 • J. W., 陽よけの若者へガンを配分
	13:30-14:00	ガジャオウラ, ワラワラの加工	<ul style="list-style-type: none"> • ワラワラの加工
2	9:30-17:00	ガジャオウラ, ワラワラをみがき, 赤オーカーを塗る	<ul style="list-style-type: none"> • オーカーを塗るガジャオウラ
	10:00-11:55	若者のうた	<ul style="list-style-type: none"> • かけあうように神話をうたう陽よけの若者 • ネリーの袋編み
	14:20-17:00	若者のうた	
	18:00-19:00	第1日めのおどり	<ul style="list-style-type: none"> • 赤オーカーで身体装飾する「むら」人 • 明けの明星, チョウ, ベンガルボダイジュ, その他のおどり
3	8:30-9:52-11:15	J. B. の母, ダンパーを焼く J. W., 若者のうたとともにガジャオウラ, ワラワラに糸まき開始	<ul style="list-style-type: none"> • J. B. の朝食 • 糸をまき, 羽をつけるガジャオウラ
	11:30-15:00	J. W., ガジャオウラほか白粘土ほりにゴウルゴウルンガへ	<ul style="list-style-type: none"> • 白粘土ほり
4	10:00-17:00	ガジャオウラ, マラジリつくり (断続的)	<ul style="list-style-type: none"> • マラジリつくり • 食糧供給トラックで買い物をする

5	17:00-18:30	2日めのおどり	「むら」人 ・赤オーカーと白粘土を体に塗る 「むら」人 ・カササギガン, 日本人, タバコ, チョウなどのおどり ・ネネケリ湿地でのカササギガン猟 ・ペーパー・パークの幹から水をとる法
	12:30-14:00	J. W. と若者, 陽よけでうたう ガジャオウラ, マラジリづくり	・マラジリづくり
	17:35-18:00	3日めのおどり (男のみ)	・水鳥, クモ, ララジャジャ (魚), ヤリなどのおどり
6	20:00-23:00	「むら」で男たちだけがうたいつづける	
	10:00-11:40	ガジャオウラ, マラジリづくり J. W. ほか, うたいつづける	・マラジリづくり (ジャンジャンのとりつけ) ・マラジリ用に射止められたサギとトキ
	13:30-15:00	ガジャオウラ, マラジリづくり	
	21:10-22:30	4日めのおどり	・精霊, ベンガル・ボダイジュ, ヤムイモ, カンガルー, ツルのおどり
7	9:20-	J. B. の母, ネリー, 網袋用の繊維をつくる	・袋あみの工程 ・井戸工事の風景
	9:40-11:20	若者, 陽よけでうたう J. W., J. B. サギとトキの羽を蜜ろうでかためて羽束をつくる	・女性のブライス河での洗濯 ・羽束づくりと蜜ろう
	18:20-20:00	5日めのおどり	・精霊, 明けの明星, カンガルーのおどり, 女性の精霊のおどり ・井戸工事の風景
8		(マラジリづくり中断)	・ワラビーの石むし料理
	9	10:20-12:00	糸まき終了, マラジリのペインティング
9	14:00	マラジリに紋様を描きはじめる	・紋様を描くナラビア老人
	14:50-16:20	ツルのボディー・ペインティング	・ツルのボディー・ペインティング
	16:45-17:00	ツルの「むら」めぐり	・「むら」をめぐるツルと供物をささげる「むら」人
	17:00-18:00	6日めのおどり①	・海鳥, ヤリ, ヤムイモなどのおどり
	20:20-20:40	6日めのおどり②	・ツル, 草原の鳥などのうたとおどり
	20:50-21:20	マラジリの「むら」入り	・「むら」をめぐるマラジリ
	21:20-21:30	6日めのおどり③	・明けの明星, 精霊, その他のうたとおどり

	22:55- 0:10	J. W., ガジャオウラ うたいつづける	
10	5:20- 7:00	マラジリの仕上げ	・マラジリを仕上げる男たち
	7:30- 8:00	マラジリの「むら」入り	・「むら」をめぐるマラジリ
	8:30	最後のおどり, 儀礼終了	・マラジリをたたえるおどり
11		ジマラ「むら」へ	・カササギガン猟 ・ジャルワラワラでのカメ料理 ・ガマディを発つ儀礼の参加者 ・ガジャオウラ, 雨にそなえて小屋を修理
12			・雨
		貝とり	・女性のイヌクログワイほり
13		マニングリダへ (撮影隊ガマディを撤収)	・貝の採集と貝焼き ・マニングリダの「まち」の人と施設
14			・ガマディ空撮
15		カカドゥ国立公園	・岩壁画の撮影
16		カカドゥ国立公園	・岩壁画の撮影

J. W.; ジャッキー・ウヌウン, J. B.; ジョニー・ブルンブルンをあらわす。

びとの協力をうるうえで、これは非常に有効な手段となった。

また撮影には、うたとおどりの意味や順序、全体の流れなどを調査する必要がある。そのためには、「むら」びととの日常的な交渉が欠かせない。ガマディ「むら」での居住経験が相対的にながい筆者が、おもにこの作業を担当した。また資料の収集を円滑におこなうには、このガマディのような「むら」、つまりアウトステーションを援助するマニングリダのバウイナンガ・アボリジナル・コーポレーション **Bawinanga Aboriginal Cooperation** (アボリジニ援助局) との折衝が不可欠である。行政的な判断をとまなうこの折衝は、国立民族学博物館助教授の小山修三が担当した。彼はこの撮影と並行しておこなわれた、文部省科学研究費海外学術調査、「オーストラリア原住民社会の経済変容—伝統経済と貨幣経済—」の研究代表者であり、ガマディを含む中部アーネムランドの事情に精通しているからである。そのほか、撮影開始から2週間にわたるマニングリダとの連絡その他には、学術調査隊のメンバーである杉藤重信(甲南大学)の協力をえることができた。

ところで、現地のさまざまな事情から、撮影技術者の人数を著しく制限せざるをえなかった。そのため、彼らの日常生活の援助をはじめ、撮影隊のハウス・キーピングが困難になるだろうという懸念があった。しかし、オーストラリア留学中の池内健(新潟大学学生)の協力で、この問題を解消することができた。さらに、撮影期間中におけるデータの収集、とくに狩猟民であるアボリジニの狩猟活動や狩猟動物の種類と

量などに関する記録は、当時オーストラリア国立大学の客員研究員であった河内まき子（東京大学）に依頼した。

この「星まつり」をはじめとするガマディでの映像音響資料の収集は、「むら」びとは無論、これら多くの協力者をえることで実施できた。その事実を、とくにここに記録しておきたい。

4. 編集作業と「みんぱく映画会」

(1) 編集作業のあらまし

ジナン族にかぎらず、アーネムランドの「むら」に暮らすアボリジニは、白人文明との相克のなかで伝統文化の維持に心をくだしている。そのため現地での撮影では、彼らにとって不都合な映像や音を不用意に収録しないよう十分な注意を払った。それをより確実なものとするため、国立民族学博物館では、ガマディ「むら」のリーダー、ジャッキー・ウヌウンと息子のテリー・ガンダディラ Terry Gandadira, およびマニングリダの「まち」にあるパウイナンガ・アボリジナル・コーポレーションのデビッド・ボンド David Bond の3人を招聘した。この3人にラッシュ・フィルムを見てもらい、精霊のうたとおどりなど一般に公開できないかもしれない映像について、その可否を判断した。さらに彼らは、「星まつり」が再現する神話を説明し、いくつかのおどりの基本動作とその意味を実演をまじえて解説した。

映画の編集はまず、この作業から開始された。それは1987年8月8日から23日の2週間にわたっておこなわれた。

映画の製作に必要な独特の編集作業は、NHK サービスセンターの上野と井ノ本があたり、各作業段階ごとに筆者との間で討論を重ねた。その多くは、現代のアーネムランド・アボリジニの生活と文化を遺漏なく映像に表現することについてやされた。こうして製作した民族誌映画には、この「星まつり」のほか3本がある。そのタイトルとテーマ、および上映に要する時分はつぎのとおりである。

① 「マラジリーアーネムランドの星まつり」 2時間20分

ジナン族、ムルグン氏族の祖先神話を再現する「星まつり」の全記録。「まつり」の詳細は第2章に述べたとおりである。

② 「森に帰ったブンゴワーアーネムランドの「むら」と生活」 1時間40分

1975年に建設された新しい「むら」、ガマディでの日常生活の記録。

ダーウィンでの生活経験をもつ「むら」のリーダー、ウヌウンを中心に、白人文明

との不可避的な関係のなかで伝統文化を維持していこうとする人びとの暮らしに関する映画である。食糧獲得活動や料理、女性の網袋づくりをはじめ、摂氏40度をこえる日中の「むら」びとの様子を詳細に記録する。この記録をとおして、物質文化をはじめ生活のあらゆる面で変容をせまられている現代アボリジニの実態を明らかにする。

③「語りかける精霊—アーネムランドのうたとおどり」 60分

この映画では、「星まつり」にうたいおどられた物語をうたの内容とおどりの所作にもとづいて解説し、現在まで語りつがれてきたジナン族の歴史と文化を明らかにする。

文字をもたないアボリジニは、うたとおどりを媒体のひとつとして、彼らの歴史と文化を語り伝える。たとえば「明けの明星」は創世神話を語り、「ベンガル・ボダイジュ」は祖先の精霊にこの木の実をささげるべきことを語る。また、「カササギガン」や「ツル」は、湿地に群れ索餌に飛びたつガンの生態や、ヒナをディンゴ（野生犬）におそわれるツルの生態を語る。そして、「ヤリ」のおどりはかつての部族間の抗争を伝える。あるいは「日本人」のうたとおどりは第二次世界大戦の様子を、そして「タバコ」は戦後の平和を語る。最後のこのふたつは、新しい歴史を伝統的な伝承型のなかに組み込んだ例である。

これら数多くのおどりには、それぞれに固有の所作がある。この映画では、その基本型と「まつり」でのおどりとを対比し、彼らのゆたかな表現力を映像化するよう試みた。

④「二万年のかなたから—アーネムランドの岩壁画」 18分

アーネムランド・アボリジナル領の境界、カカドゥ国立公園に残されている岩壁画の解説を目的に製作した映画である。この岩壁画は、2万年前から現在にいたるアーネムランドの環境変化と、アボリジニの思想を知るうえできわめて重要である。

海進による入り江の形成（9000年前）以後は、岩壁画に魚類やワニのモチーフが多くなる。アーネムランドがいまよりも乾燥していたといわれるそれ以前には、絶滅したタスマニア・タイガー（袋狼）が描かれている。また、7000年前ごろからいわゆるレントゲン画法が出現し、稲妻の精霊や西アーネムランドでミミとよぶ精霊、ヤリ投げ器などが描かれはじめる [MOUNTFORD 1956: 112-181]。こうした岩壁画のモチーフの変化からは、アボリジニに特徴的な世界観の形成や、狩猟技術の展開の時期が推定できる。

(2) 「みんぱく映画会」

この4本の映画は一連のもので、その共通タイトルを『狩人の夢』とした。これを

最初に公開したのは、国立民族学博物館が主催する「第6回みんぱく映画会」である。この映画会は「狩人の夢—変容するオーストラリアの狩猟採集民」と題し、1988年3月20・21日の両日、国立民族学博物館の講堂でおこなわれた。第1日は①と④を、第2日は②と③を上映した。それぞれの映画には、小山と筆者とが簡単な解説を加えた。この映画会の入場者数はあわせて733人を数え、おおむね好評だった。

また、この長編の民族誌映画が一般になじまないことを懸念した筆者らは、かつて国立民族学博物館が収集したウヌウンらの木皮画など、ガマディ「むら」に関する標本資料の一部を公開し、解説を試みた。この試みは、資料の管理や保存などをおこなう情報管理施設の資料室をはじめ、映画会を企画した企画課の諸氏の援助によってはじめて可能になった。このこともまた、ここに記録しておきたい。

5. お わ り に

1986年の現地取材から1988年3月の映画の公開にいたるまで、筆者らは実に多くの人びとのお世話になった。撮影を許可し、そのうえ「星まつり」を催してくれたガマディ「むら」の人びとには、その労をねぎらう意味をこめて、おのおのの映画の末尾に協力者として氏名を掲げた。

この報告は、「星まつり」を中心とした映像資料により多くの情報を加え、資料の価値をたかめることを目的とした。第2章に多くの紙数をあてたのはそのためである。また、この短い報告には、映像音響資料の収集から公開にいたるまでの経緯を記録にとどめたいという意図があった。それは資料の価値をたかめるだけにとどまらず、資料の収集と公開にあたって協力をおしなかった人びとへの感謝をあらわすことにもなると思うからである。なお、映画②「森に帰ったブンゴワ」に関する情報は、筆者がすでに発表した報告にもりこんだ【松山 1988】。そのふたつめに相当するのがこの報告である。

謝 辞

ジャッキー・ウヌウンをはじめとする3人の人びとの招聘にあたっては、豪日交流基金東京事務所および関西オセアニア協会に格別の協力をいただいた。ここに記して、あらためてお礼申しあげる。なお、この報告の骨子は小山修三助教授が主催する国立民族学博物館の共同研究「オーストラリア社会の研究」で発表した。その際、有益なコメントをいただいたメンバー各位にお礼申しあげる。

文 献

BORSBOOM, A. P.

- 1978 *Maradjiri: A Modern Ritual Complex in Arnhem Land, North Australia*. Nijmegen: Centrale Reprografie Directoraat A-Faculteiten Katholieke Universiteit.

松山利夫

- 1988 「アーネムランド・アボリジニ, ジナン族の狩猟と食物規制」『国立民族学博物館研究報告』12(3): 613-646.

MOUNTFORD, C. P.

- 1956 *Records of the American-Australian Scientific Expedition to Arnhem Land: 1 Art, Myth and Symbolism*. Melbourne University Press.

TINDALE, N. B.

- 1974 *Aboriginal Tribes of Australia: Their Terrain, Environmental Controls, Distribution Limits and Proper Names*. University of California Press.